

虎と龍ときどき私

「我が社にようこそ」

「む」

「音夢や、なんでそんなに嫌そうな顔してるわけ？」

「だって、また虎先輩たちと一緒にじゃないですか」

「僕も虎もまた音夢と一緒に働いて嬉しいよ。はい、今日のお弁当」

「有難うございます。龍先輩。きょうの料理は何かな」

「うん、オニギリとスープとハンバーグとか色々入ってるよ。しっかりと食べてね」

「龍先輩には高校生の時からお世話になってます」

音夢が嬉しそうに話すと虎が頭にチョップをする。

「ねーむ、俺にあえて嬉しく無いのか？」

「微妙です」

「び、微妙！？なんで俺だけ微妙なわけ？」

「オカン属性の龍先輩は料理を食べさせてもらえるけど、無駄にイケメンなお二人ですよ。私が女子からいじめられます」

「イケメンなのは嬉しいけど、いじめられるんなら俺らにいえばいいじゃねーか」

「更にひどくなるし。そもそも彼氏でも無いのに言いませんよ。だから、近いので離れてください」

「音夢、そんな言い方したら虎が可哀想だよ。僕は近くに居れて様にならずと、餌付けしてたから、この通り懷かれたけど。虎は何もし

ていないでしょ？」

「つく！俺に料理する能力があれば」

「虎が料理したら消し炭になっちゃうよ。そんなの食べさせられないさ」

二人が言い合っているなか、音夢はお弁当を食べると帰る支度をする。本日は研修だった為昼で終わり。この会社は社員に優しく本日は皆昼上がりだった。まだ、仕事らしいことをしていないが、終わったのなら帰るだけ。

「じゃ、お疲れ様です」

「まてまてまて！音夢なんで俺達を置いて帰ろうとするんだよ」

「え？だって、薄い本を買いに行かないと行けないので。今日販売日なんです」

「うすい、本？」

「虎多分、同人誌のことだと思う。内容はBだね」

「びー、える。つまり、男と男がイチャイチャする感じの？」

「おそらくそうだね。音夢、僕は抵抗ないから一緒に着いていっていいかな？」

音夢は眉間に皺を寄せ、龍を睨むが爽やかから笑顔でスルーされる。

「お、俺も行く！B」がなんだってんだ。俺だって問題ねえんだよ」

「ほほう。つまり、二人はB本に興味があるのですね。ふむふむ。読んだ事は有りますか？」

「「ない」」

「へー、じゃあ、過激な行為のシュチュエーションでも大丈夫と」

「過激？」

「あゝ、虎、多分性行為の事じゃないかな。B」本も甘々から激し目まで色々あるから」

「なるほど、別に気にしねえ」

二人はついでに行く為に大丈夫だと言うと音夢は頷いて会社を出た。二人はその後を追いかけて行く。

音夢は改めて二人を見る。金髪で少し長めの髪にピアスをしている龍。黒髪で目が細くどちらかと言えばヤンキーに近そうな虎。そんな二人は高校時代ヤンキーをしていた。しかし、ある日声をかけられた時に、イラついている音夢が強めに言い返すと何故かそれ以来気に入られた。どうやら度胸の座った女性がお互いに好みだったらしい。一つ上の先輩だった為卒業したら離れるかと思いきや、大

学まで一緒、そして、職場まで一緒になっていた。

「二人とも遅い。本が売り切れます」

「音夢って、運動してないのに足速いよな」

「オタク魂が凄まじいのだろうね」

こそこそと話している虎&龍。しかし、そんな事はどうでも良く、ほったらかしにして急ぐ音夢。本日買いに行くB本は同人誌の中でも人気の本なのである。今回を逃したら買うことができないかもしれない。その気持ちだが、急がせる。

「ついた！えつと、ここの奥にある新刊。∴有りましたー！ω冊」

「は？同じのω冊買うのか？」

「虎先輩、これは保存用、観賞用、読み倒し用として買うものなのですよ」

「…そうなのか？なあ、龍そう言うもんか？」

「うーん、僕もそれはちよつと分からないね」

「ゲットしたので物色してきます。掘り出し物が見つかるかもです」

「俺も行くぞ」

「虎先輩が来ると目立ちます。それともおすすめの本があるのですか？」

「…、ない」

「じゃあ、待ってて下さい」

「はい」

落ち込みながら虎は近くにある本を手にとると男性が二人並んでる表紙を見て固まる。

「虎、俺達は免疫がないんだから、読んだら固まっちゃうよ。悪いとかそう言う次元じゃなくて、驚いちゃうよって事」

「おう、そうだな。しかし、いろんな本があるんだな」

「だね、外で待ってる？」

「そうするか」

龍と虎は音夢に声をかけると外の入り口付近で待っていた。三分ほどしただろうか、大きな紙袋を持ってほくほく顔の音夢が帰ってきた。

「おう、おかえり！これから居酒屋行くか？」

「いえ、戦利品を読みたいので帰ります」

「まじか。俺達とご飯行こうぜ？な？」

「読みたいので無理です」

「音夢、お茶漬けの美味しい店があるんだけど、一緒に行かない？」

「行きます」

食べ物にも弱い、音夢は龍の声に頷いて、ついて行く。ポツンと置いてかれる虎は我に戻り慌てて後を追った。

「ここが、美味しいって言う評判の居酒屋だよ」

「お茶漬けの杯下さい」

「はいはい、虎はどうする？」

「俺刺身」

「僕も刺身にしようかな。じゃあタッチパネルを押して行くね」

龍がご飯の注文をしている時に、音夢は、本を一冊出し、読み出す。

「おまつ、ここで読むのか、いくらテーブル席でも周りがいるだろう」

「オタクが好きな時に好きな本を読んで何が悪いのです。続きが気になるので見ているだけです」

虎がちらりと音夢の読んでいる本を見ると、激しめなシーンを淡々と読んでいた。思わず顔を赤くする虎に平然とする音夢。

「音夢は昔からマイペースだよね」

「龍、これってマイペースって言えんのか？」

「まあ、マイペースだよね」

「つたく、ちったあ俺達の事意識してくれても良くね？」

「それは、すぐには難しいんじゃないかな。付き合い長いし」

「はあ、いつになったら男として見てくれるのかね」

「確かに」

二人の話を全く聞いてなかった音夢は本に夢中になって読んでいた。



「お茶漬け美味しかったです。ご馳走様です。龍先輩、虎先輩」

「うん、気にしないでいいからね」

「ご飯ぐらい俺がいくらでも奢ってやる」

「メッシー君ゲット」

「メッシー言うな。お前は全く」

虎が頭を小突くところ、笑って音夢はお礼を言う。

「本当に有難う御座いました。楽しかったです」

「そう言うところ反則だろうが」

「はは、僕ら振り回されてるよね。でもそれでいいと思ってるけど」

「それじゃあ、送ってくださって有難う御座いました。また明日会いましょう」

「おう、いい夢みろよ」

「おやすみ、音夢」

「おやすみなさい」

返事をして、実家に入って行く。高校卒業しても、大学生になつても実家が大好きな音夢は一人暮らしはしなかった。それともう一つ夢のためでも有り、しなかったと言うものもある。

「ママ、ただいま」

「ねむ、おかえりなさい。ご飯は食べてきたんでしょ？」

「うん食べてきた。ねえママ、私、最近漫画が上手く描けないの。少女漫画を描いているママはそんな時どうする？」

「ん？何言ってるの。貴女にはとつても良い先輩がいるじゃない。取材させてもらったら？」

「先輩？龍先輩と虎先輩？」

「そうそう、その二人を題材に書かせてもらったらどうなの？」

「…いいかも」

「きつと良い作品ができるわよ」

「うん、聞いてくれて有難う」

音夢は部屋に戻り本を大事に片付けると、ベッドに横になる。漫画家として食べていきたい音夢は[B]を主体に描いている。しかし、最近行き詰まっていた。

（先輩達のカップリングどうしよう。虎×龍？それとも龍×虎？）

「どっちも悩む」

うとうとしながら寝る寸前までカップリングを考えていた音夢だった。



あれから、数日の時が経ち、音夢は二人を観察していた。経理部で一緒の龍。彼はスマートで仕事もできる。女性に人気で黄色い声がよく聞こえるほどだ。

（どうやったら、二人の話考えられるかな）
悩んでいる音夢に、龍が話しかけてきた。

「どうしたの？眠たい？音夢、お昼までもう少し待つてね」

「うん、お腹すいた」

「はは、今日のお弁当は美味しいよ」

「うん、有難うございます」

（龍先輩はまめな感じ。虎先輩相手でもまめに対応するって言う設

定にしたらどうか)

一つ考えがまとまると、ニヤリと笑い、仕事に向き合う。

「お、やる気が出たみたいだね。えらいえらい」

「うん、やる気全開なのです」

「やっぱり、音夢は可愛いね。ずっと撫でていたいぐらい」

「それはやめておきます。虎先輩にしてあげてください」

「なんで虎？」

「きつと、尻尾を振って喜ぶと思うのです。うん絶対にあり」

「子供の頃から一緒にいるけど、僕が頭を撫でたら絶対に顔を青ざめると思うよ」

「いやいや、密かに喜んでるに違いありません」

「うん？？」

よく分からない発想に困惑する龍。仕事が残っていた為自分の席に戻る。しかし、音夢の考えがわからず、午前中仕事が手につかなかった。

「んん、終わりました。ご飯の時間」

部署の人達は食事を食べに外へと向かい、今いるのは龍と音夢だけ。

「おうす、昼行くぞ」

虎が笑顔で話しかけ、ドアを開ける。その虎を見た瞬間、音夢はニヤリと笑った。

（龍先輩のお迎えをする虎先輩。やつぱりカップリングは龍×虎）

「あ、虎来たんだね。音夢もお弁当食べよう。何処で食べる？公園？食堂？」

「お、公園でも良いんじゃないね。もう春だから暖かいし、飯もうめえ時期だろ」

「そうだね。じゃあ、そうしようか。音夢、いいかな？」

「勿論大丈夫です」

（ふふ、幼馴染だから、息もぴったり。どうやって恋愛に発展するのだろう）

心の中で、考えながら二人の後について行く。会社を出て公園のベンチに座るとお弁当を渡された。

「今日は肉じゃがに入れて見たんだよ。筍ご飯を炊いたんだ。音夢は好き？」

「筍大好きです」

「良かった。音夢の喜んで欲しくて頑張ったんだよ」

「で、俺のはついでね」

「そうそう、虎のはついで」

「おま、あからさまにすんなよ」

「良いでしょ。これくらいしないと音夢は気づいてくれないんだから」

（ついでと言いつつ虎先輩のご飯を作る。これは怪しいタイミングです！）

目を光らせて二人を見ていた音夢を見て龍は嫌な感が走った。

（もしかして、分かってないか。それ以外のことを考えてる？）

目があった音夢が微笑んで龍を見た為、彼は顔を赤めて俯いた。

（不意打ち、音夢の笑顔は心臓に悪い）

「筍うめえ、この時間音夢と一緒に飯食えて最高だよな。まあ、龍もいるけど」

「それはこちらのセリフだよ。虎が邪魔しなければ、音夢と二人つきりなのにな」

「それはさせねえ」

（なんだかんだ言いながら二人は意識し始める……うんうん、良い設定）

ニマニマと笑う音夢に虎は不思議そうにしながら話しかけた。

「今度泊まりの新人研修あるだろ？あれ、引率に俺が行くことになった」

「僕も引率係だよ」

「ここでも息ぴったりですね」

「あのな、俺は音夢と一緒に泊まりに行けて嬉しいだけだよ」

「僕もそうだよ。夜とか出かけちゃう？」

「龍さんや、引率者としてあるまじきセリフだな」

「虎さんこそ、一緒のお泊まりに喜ぶところが怪しいですけど」

「龍ほどあからさまじゃねーよ」

「手段を選ばないだけだよ。手段なんて選んで自覚してもらえないなら既に付き合ってるよ」

「ほほう、俺を差し置いて付き合うとか絶対にゆるさねえ」

（他の人物が入るのが許せないのですね。二人の絆って事です）

全く違うことを考えてニマニマしている音夢を見て虎は頭を傾けた。

「なんか良いことあったのか音夢？ニヤケ顔だぞ」

「ああ、なんかね今日ずっとそんな感じなんだよ。僕たちを見てニヤヤしてるんだよね」

「まさか、ついに俺たちの想いが伝わってにやけてるのか！？」

「いや、絶対に違う。あれは斜め方向に行ってる時だと思うよ」

「なんだよ。斜めって、他に好きな男ができたってことか？」

「いや、虎。それは観察してるけど、いる雰囲気じゃないよ」

「龍、それじゃあどう言う意味だよ」

「なんか嫌な予感がするんだよね」

「「はあ」」

二人のやりとりに気づかず妄想をする音夢。ご飯はしっかりと全部食べるとメモ帳に何かを書き込みながらニマニマしていた。

「あのメモ帳なんだ？」

「虎、あれはどうやらアイディア帳らしい」

「へー」

「全く何を考えているんだか」

結局二人は音夢の考えがわからずに昼が終わった。この日だけでなく、毎日のようにニマニマ音夢を目撃が情報が増えることとなる。その度に頭を悩ます、龍と虎だった。



なんだかんだで研修日初日を迎えることとなる。朝から夕方までオリエンテーションを受け、コミユ障の音夢はやや疲れ気味だった。「お風呂、こつちです？」

やっと終わった研修一日目。ご飯を食べて、お風呂に入る準備をして、中に入った。脱衣室は誰もおらず、お風呂場にタオルで裸を隠して向かうと、虎と龍の二人が温泉に入っており目があつた。

「……え？先輩達女性湯で何をしてるんですか？」

「音夢……！！前、見えてるからちゃんと隠せ！」

「虎先輩痴漢ですか？」

「いいから、早く隠せ！」

「はは、眼福だね。なんならタオル外しても良いんだよ音夢」

虎が龍の頭を叩くと、音夢はなんとなくお風呂の中に入ってきた。

「おまつ、なんで入ってきたんだよ！」

「虎先輩、寒かったので入りました。あ、タオル、温泉につけたらだめですよ。外さない」と

「ば、バカ。外すな。音夢、絶対に外すなよ」

「とーら、焦りすぎだよ。音夢僕が抱きしめて隠してあげようか？」

「それより、なんで女湯に居るんですか？」

「ここはね、男湯だよ。音夢が間違ったみたいだね」

「私でしたか……。龍先輩」

「なに？お兄さんに抱きつきたくなった？」

音夢は龍の体を触り、ポツリと呟く。

「綺麗な体ですね。触っても良いですか？」

「もう触ってるけどね。勿論良いよ」

「おいって！」

「嫉妬しないで虎。さあ、さわっていいよ音夢」

手を動かしてゆつくり触ると、ゴツゴツした感触。音夢が触った筋肉がピクピク動く。

「音夢、気持ちいい。もつと触って」

「…先輩って男性なんですね」

「そうだよ。虎だって男性。そして、音夢は女性」

「私と全然違う」

「音夢…、君は女性なんだ。ほら、お腹を触るよ。ここから上にも下へも触る事ができる。女性の大事な部分であり、反応する部分でもある」

「…うん」

「ねえ、音夢。俺と虎で触ってもいいかい？このお尻みたいに胸や下を触りたい」

「わたし、…なんか、湯渡しました」

「ええ！？湯渡！？大丈夫なの？」

慌てた龍と虎は音夢を抱きしめて急いで脱衣室に向かった。そして、椅子の上に寝かせると近くにあった団扇で仰ぐ。

「つたく、龍、攻めすぎるなよ」

「虎、分かってるけど我慢できなかったんだ。音夢の裸を見て、気分が高揚した」

「まあ、俺もだけど。けど、急ぎすぎるな。ゆつくりでいいんだよ」

「分かったよ。仕方ないね。他に取られなくなかったからつい欲が出たんだ」

「まあ、龍ばかり攻めれないわな。俺も音夢の噂聞くんだよ。可愛い新人が入ってきたって。男性職員がよく騒いでやがる。しめてやろうかって思ってしまうぜ」

「その気持ちよくわかるよ。同じ部署でも感じるんだから」

二人は苦笑いをする。音夢に浴衣を着せて部屋に連れて行く。たまたま一人部屋だった為騒ぎになることはなかった。

「起きるかな？」

「起きるまでそばにいるか。龍、手を出すなよ？」

「分かっているよ」

二人が話しているとや音夢はゆっくり目を覚ました。ぼーつとす

るなか、体を起こし、ふらつく体を虎が抱き止めた。

「大丈夫か？」

「うん、平気です。お風呂場では間違つてごめんなさい」

「かまわねえよ。それより、水いるか？」

「いる」

「口移しで飲ませてやろうか？」

「それは、龍先輩にしてあげてください」

「……ん？なんで龍？」

「いえ、なんでもないです」

「はい、お水だよ音夢」

「有難うございます。龍先輩」

龍にお礼を言うのとペットボトルを持って水をグビグビ飲む。熱っ

ていた体も少しずつよくなった。

「今日はごめんね、セクハラしちゃった」

「龍先輩がお尻を触った事ですか？」

「そう、柔らかくて気持ちよかったよ」

「でも、別に気にしてないです」

「そうなの？」

「龍先輩は両方いけそうなので、生理的に欲情したのかなと思います」

「生理的ね」

「違いましたか」

「はあり、うちのお姫様は自覚するのにどれだけ時間がかかるのか

…」

「自覚??」

「まあ、今日は引いてあげる。体調が大丈夫なら俺たちは部屋に戻るよ」

「はい、大丈夫です」

「音夢、言っておくけど、引くのは今回だけだよ。次は無理してでも分からせる」

「よく分からないですけど、気をつけます」

「うん、そうだね。気をつけないと食べちゃうからね」

「はい、すいません」

「じゃあ、虎一緒に帰ろう」

「俺が抜け駆けしないようにか？」

「勿論そうだよ」

(二人は両思い)

二人が聞いたら猛烈に怒りそうな事を考えながら、ぼーっとする音夢は夢の中にいた。



研修2日目。本日は講習を受けていた。その中には龍や虎が講習をすることもあった。他の女子生徒は黄色い声援をおくり、二人は一気に噂の人になった。

（ああ、二人が近くにいるとまた、いじめられちゃいます。逃げよう）

今日はぼっちをを目指して、隠れながら講習室を離れると何故か二人が立っていた。

「お弁当買ってきたよ。一緒に食べよう」

「龍先輩、今日は一人で食べたいです」

「ダメだよ。絶対にダメ」

「なんでですか！？たまには他の方と食べた方が良くないですか？」

「は？何言ってるの？昨日の今日で、なんでそんな話になるの？」

珍しく怒っている龍に、音夢は肩をびくつかせた。

「龍先輩、えつと、他の女性と食べないのですか？」

「あのね、音夢がいいの。どう言う考えでそうなるの？分かせようか？」

「龍、あんまキレるなつて。音夢、俺たちを避けようとするなよ。」

龍は特に短気なんだからよ」

「避けてない、です」

「昨日の事気にしてんのか？」

「いえ全然」

「それはそれで、悲しいな」

「その女性社員から睨まれたくなくて、嫌だから避けてました」

「音夢、言っただろ。俺も龍も何かあれば助けてやるつて、だからさ、避けたりするな」

「でも、」

「頼むよ。俺ら音夢に避けられると結構ダメージ喰らうだよ。そして、暴走するかもしれない。お前を誰にも見せねえように何処かに隠すかもしれない。そんなことしたくないんだよ」

「分かりました。けど目立ちたくないのです」

「俺らそんなに目立つか？」

「だってイケメンだから」

「イケメン…やば、めっちゃ嬉しい。音夢にイケメンとか思われてたんだって思ったらちよつと自信になるわ」

「ちよつと虎。勝手に喜んでないで。ぼくはまだおこってるんだよ

音夢」

龍が話に割って入ってくると、音夢はしょぼんとした顔をして、謝った。

「御免なさい」

「仕方ないね、じゃあ、今日ご飯食べながら愛してるよゲームしてもいい？」

「愛してるよゲーム？」

「照れた方の負けてことだよ」

よく分からないが、龍の提案に乗って、お昼を公園で食べに行くことにした。

「さてと、愛してるよゲームを始めるよ」

「お願いします」

「音夢、出会ったあの日からずっと愛してたよ」

「そうなのですね」

「音夢のことと思ういつもドキドキする。眠れない日だってあるん

だ」

「不眠ですか？」

「音夢、愛してる。僕のものになって欲しい」

（それは私に言わせてると見せかけて虎先輩に言ってるのかな？練習？）

「音夢が欲しい。他の女性なんか全く目に入らない。愛しいって思うのも、全て音夢なんだよ」

「ふむふむ」

「音夢…」

肩を持って引つ張ると倒れる音夢を押し倒す。

「床ドンって言うんだよ。ねえ、唇が近いね、キスしちゃいそうだ」

よ。食べてしまいたい」

（これを虎先輩にしたら）

思わず妄想の中で二人を浮かべて顔を赤くする音夢。

「顔赤いね、少しは意識してくれた？」

（虎先輩が意識しました）

「つておい、そこまでだ」

虎に止められて龍は渋々離れる。虎もゲームをするかと思いきや、意外と律儀に音夢を起こす。

「音夢、ゆっくりでいいから俺らを男として見てくれ」

「男としてですか？」

「そう、俺らはずっと、一途に音夢を思っている」

何か言おうと思ったが真剣な虎の様子に音夢は何も言えなかった。

お昼が終わる時間になり三人は講習に急いで戻ることにした。それから、午後の講習が始まり、あつという間に一日が終わる。一泊二日の研修は無事に終わることとなった。



研修の日の出来事はなんだったのか、いつも通りに過ごす三人。季節は夏に近づいていた。

「そろそろ、夏だし出かけねーか？音夢」

「もう予定がありますので無理です」

「な！？おい、龍！抜け駆けは禁止だつて言つただろ！」

「僕じゃないよ。むしろ僕の目を盗んだアホは何処のやつだろと思つてるよ」

苛立ちながら言う龍に虎は音夢を向いて話しかける。

「誰と出かけた？」

「一人です」

「一人？つてかそれなら、いつも通り俺らを連れて行けよ」

「じゃあ、条件として売り子になつてもらえるなら交渉成立です」

「う、売り子？おう、いいぞ」

「約束ですよ。龍先輩もいいですか？」

「勿論良いよ」

二人に許可をもらいニマニマ顔の音夢。なんだかんだで、約束し

ていた日になった。広い会場に机があり、大量の本が置いてあるところに龍と虎は売り子さんとなる。

「なあ、この本はなんだ？」

「どうやら、音夢が書いた漫画らしいよ虎」

「この本って、」

薄い本をペラペラと開きながら中を見ると何故か見たことがあるシーンと、登場人物。

「この本BIだよな？」

「そうだね虎」

「この本の二人って俺たちだよな？」

「そうだね虎」

「まさか、今までのことって脳内変換されていたのか？」

「どうやらニマニマしている音夢はこれを考えていたみたいだね」

「マジか」

落ち込みを隠せない虎をみて龍もため息がついた。

「あの本ください」

いつの間にか始まっていたコミケに、龍と虎のブースは大量に人が並んでいた。

「ねえ、あのイケメン達本人よね」

「ぜったいそうよ、やばいです」

女性達が売り子をしている龍と虎を見てこそそそと話していた。

「買い物してきました！うれてますか？」

「音夢、お前な、どんな脳内変換してんだよ」

「虎先輩、ネタ提供有難うございます」

「どうやら、しっかりと仕込まないといけないようだね」

「仕込む？」

龍が怒りながら言う言葉に音夢が首を傾けるとそれが更に煽る。

「分かった。これから、しっかりとたつぷりと愛してあげる」

「俺ももう止めねえ、覚悟しておけよ音夢」

二人が怒っていると音夢が周りを見て人がいないことに確認して二人に言う。

「お願いします、付き合ってください」

「「は？」」

「だから、セカンドパートナー制度を題材に描いてみたいです。だから、仮で付き合ってください」

「題材、いや、この際、関係ない。意識してもらえんなら喜んで

やるぜ」

虎が言う。と龍も頷いた。セカンドパートナー制度とは重婚が認められた制度のことだ。最近少子化で建てられた制度だった。

「有難うございます」

「覚悟してろよ音夢」

「そうだよ、僕の愛は重いからね。仮から本物にしてあげるからね」

音夢は頷くとスマホを見て笑顔になる。

「冬コミケが当たりました！セカンドパートナー制度を頑張って書くぞ」

音夢の大声が会場内に広がり、周りが振り返る。しかし本人は気づいていない。

「世話が焼けるな。隠してやるからこつち来い」
虎が言うと言夢は素直に近づき抱きしめられる。反対側から龍が抱きしめて結局目立つようになってしまった。



「鬼頭くん、懐かしいわね？音夢の高校以来かしら」
「はい、お久しぶりです」
「アシスタント本当にいいの？」
「音夢にも会えますし仕事も好きなので大丈夫です」

「音夢って意外とモテるのよね。これから一波乱になりそうね」

音夢の母が苦笑いをしながら、つぶやくのだった。